

ワンピースを脱がされ、桃色の可愛らしいデザインのレースの下着姿でベッドに横たわりながら、さつきは消え入りそうな声で訴えた。

（お姉ちゃんに、負けたくない）

という一心で、なけなしの勇気を振り絞って自分から求めたことだった。それに、智和と結ばれる日をずっと夢見てきたのだから、本当ならこんなに嬉しいことはない。とはいえ、実際に大好きな人に下着姿を見られていると思うと、恥ずかしさのほうがかうまわってしまう。

それに、友人たちと比べても幼さの残る体型が、少女の心に大きなコンプレックスになっていて、いっそう羞恥心を強くしていた。

トランクス姿の智和は、少女のブラジャーをはずし、寝転がるとほとんど平坦と言ってもいい小さなふくらみを露わにした。

「あつ……やっぱり……」

身体を横にひねり、うずくまるようにして胸もとを隠すさつき。

「どうしたの？ 怖い？」

「……ううん。その……恥ずかしくて……」

がんばって声を絞りだしているのに、もう蚊の鳴くような弱々しい声しか出てこな



かった。貧相なバストを見られたこともあるが、智和が目の前を意識するだけで、緊張しすぎて言葉を発することもままならない。

心臓が、バクバクと大きな音をたてて、喉から飛びだしそうなくらい大きく跳ねている。

以前、「どうしても」と勧められて一度だけコンクールに出場したときにも、こんなふうになって声を出せなくなった。あのとき以来、少女は人前で歌うどころか、大きな声で話すことすらままらなくなってしまったのである。

「さつきちゃん。手、どけてよ」

智和が、優しく声をかけてくる。

だが、さつきは目を閉じたまま、無言で小さく首を横に振った。

「僕に胸を触られるのが、イヤなの？」

その質問にも、頭を振る。

（違うの……大好きなお兄ちゃんに身体を見られて……すごく緊張して、恥ずかしいの）

言葉に出して言いたかったが、内気な少女の勇氣はもう限界に達していた。胸の鼓動が、コンクールに出たとき以上に激しく高鳴っている。あまりにドキドキすぎて、

このまま心臓麻痺でも起こしてしまうのではないか、という気さえしてくる。

智和は、困ったような顔で少女を見ていた。が、すぐになにかを思いついたらしく、体の位置をずらす。

目を閉じながらも、さつきは少年の動く気配を感じていた。しかし、なにをしようとしているのかまではわからない。

不意に、智和が少女の足首をつかんだ。

さつきが、「えっ?」と声をあげるのとほぼ同時に、足が大きく割り開かれた。

桃色のレースの下着に覆われた秘部に、少年の視線が釘づけになっている。

「あ……あ……」

突然の行動に、さつきは拒絶の言葉を出すこともできなかった。頭が真っ白になってしまい、どうすればいいのかも考えられない。

「さつきちゃん、先にこっちをしてあげるね」

少女が混乱している隙を突いて、智和がまだ毛もほとんど生えていない秘所に顔を近づけ、パンティーの上から舌を這わせはじめた。

「んあっ……おにい……そんなところ……あんっ……ダメえ……」

かろうじて言葉を発するが、智和は布の上からの愛撫をやめようとしめない。あまり

にか細い声なので、もしかすると少年の耳に届いていないのかもしれない。

奥手^{おくて}とはいえオナニーはしているし、学校教育やいろいろな雑誌のおかげで、さつきも多少の性知識を持ち合わせていた。だが、布越しでも性器に口をつけられるなど、乏しい知識の範疇^{はんちゆう}にはまったく入っていない。

そのため、少年の行為にただただ驚くばかりで、なんとか振り払おうとかやめさせようという考えが湧いてこなかった。

（ああ……わたし、お兄ちゃんにあそこを舐められてる……こんな……胸を見られるより、もっと恥ずかしいのにい）

そんな少女の気持ちを知ってか知らずか、智和は割れ目の筋に沿って舌を這わせ、下着に唾液^{だえき}をまぶしていく。

しばらくつづけられていると、さつきのなかには次第に恥ずかしさ以外の感覚が生まれはじめた。

「んっ……んんっ……ふむううう……んっ……」

股間から痺れるような信号が脳に送りこまれ、熱い吐息が自然にこぼれる。

それとともに、秘部の奥がだんだんとうずきはじめた。

（オナニーをしているときにも、同じような感じに……か、感じてる……わたし、お

兄ちゃんにあそこを舐められて感じちゃってる……液が……恥ずかしい液が出ちゃうの……でも、我慢できない」

少女が快感に酔いかけたところで、智和が舌をとめて濡れた布をめくった。生地が離れる感覚とともに、口を半分開きかけた割れ目が外気にさらされて少しひんやりする。

（ああん……お兄ちゃんが、わたしのあそこを見てる……視線を感じるよお）
恥ずかしさのあまり、ずっと目を閉じているが、それでも少年の熱いまなざしがさつき自身に注がれていることが、はつきりとわかる。

「さつきちゃん、すこし濡れてるね」

という指摘に、さつきは思わず頭を振った。

（違う……お兄ちゃんのよだれだよ。わたし、そんなにエッチじゃないもん）
声に出して言いたかったが、内気な少女にはそれができない。

もつとも、少年はさつきが言おうとしたことを態度で悟ったようだ。

「ふーん。さつきちゃんは、これが僕の唾だって言いたいんだ。でも、これもそうなのかな？」

智和は、不意に指を大陰唇のなかに入れ、軽く動かした。